



はる つじ 原の辻遺跡内における津合橋の修景検討について

壱岐地方局 建設課 ◎片山 豊大
○岡本 征大

1. はじめに

玄界灘に浮かぶ壱岐は、平成16年3月1日に芦辺町、石田町、勝本町及び郷ノ浦町の4町が合併して誕生した市であり、総面積約138km²、人口約31,000人の美しい海と歴史の香りに包まれた島である。

壱岐島では国の歴史的財産とも言える『原の辻遺跡』が発見されている。原の辻遺跡は、主に弥生時代に形成された大規模な多重環濠集落で、古墳時代前半まで存続していたと言われる。原の辻遺跡は、魏志倭人伝の中の「一支国」の王都と特定され、国指定特別史跡として、現在も発掘調査が行われている。

この原の辻遺跡を復元しようと、長崎県と壱岐市により原の辻遺跡復元整備事業が行われており、これに伴い、遺跡区域内に架かる『津合橋』も、今後整備される弥生時代の景観との調和を図る必要があるということから、『主要地方道勝本石田線道路改良工事（原の辻工区）』の一環として、修景の検討が始まった。今回は、この津合橋の修景検討について紹介したい。



図 1-1.津合橋位置図

2. 津合橋の概要

所在地：壱岐市芦辺町深江栄触

路線名：主要地方道勝本石田線

橋 長：40.2m

最大支間長：19.9m

総幅員：10.8m

橋梁形式：2径間単純

ポステンT桁

架設年次：1979年



写真 2-1.津合橋現況写真

3. 美しいまちづくりアドバイザー制度

津合橋の修景検討・計画は、今後整備される弥生時代の景観との調和を図る必要があるということから、長崎県、壱岐市、長崎県教育庁及び学識経験者で検討会議を開催し、協議することとした。また、美しいまちづくりアドバイザー制度を利用して、長崎総合科学大学の林学長をアドバイザーとしてお招きし、景観計画のご指導、助言頂いた。

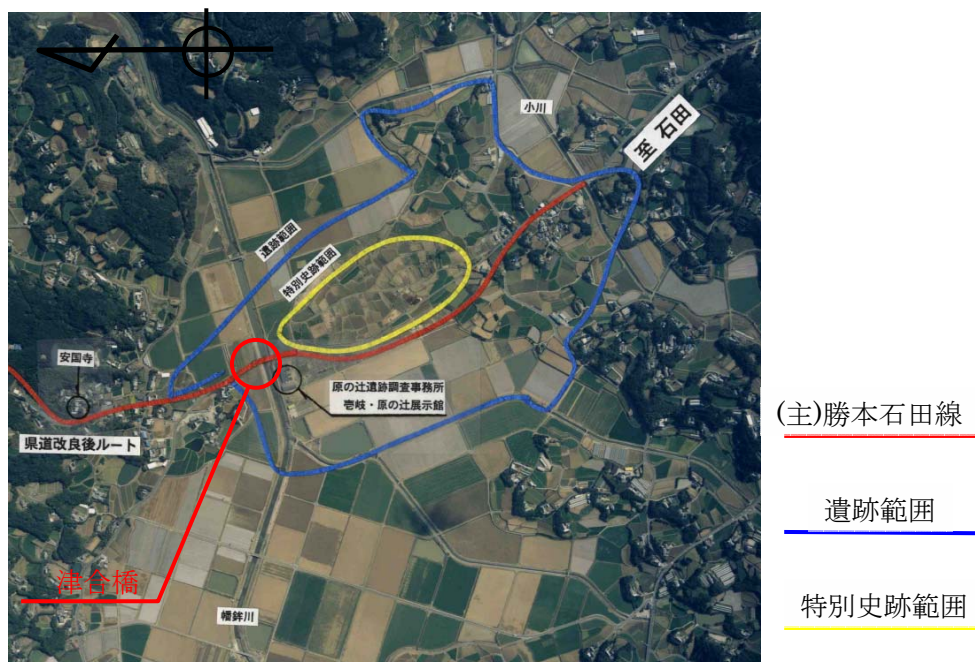


写真 3-1.原の辻遺跡航空写真

4. 修景検討の基本方針

4-1 求められるデザイン

津合橋を含め、遺跡区域内の現代の工作物の景観と、今後整備される弥生の景観とが調和の面で問題となるのは、一般的には当時にはあり得なかった素材や色・形、あるいは高度な技術を要するものなどが考えられることから、求められるデザインの要件としては、

① 現代的な印象を抑えたデザイン

整備される古代の景観に馴染まない現代的な印象を極力抑えたデザインとすること。

- ・現代の素材（アルミ、ガラス、コンクリートなど）の印象を抑える。
- ・鮮やかな色彩を抑える。

② 存在感を抑えたデザイン

土木構築物としてのボリュームや力強さなどの威圧感を抑えたデザインとすること。

- ・広い面や大きな塊の印象を避ける。
- ・大きな力の流れを感じさせない。
- ・繊細な形態を用いる。

③ 弥生の景観に調和するデザイン

弥生の（自然の）景観に調和するデザインとすること。

- ・自然の素材の印象を用いる。
- ・デザインとしての形態の引用にも配慮する。

以上3点を検討モデルの意匠面での評価基準として、デザインの方法を考えることにした。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 現代的な印象は抑えられているか。 ○ 土木構築物としての存在感は抑えられているか。 ○ 「弥生の原風景」に調和しているか。 |
|---|

4-2 デザインの方法

景観面での不調和を改善するデザインの方法として次のことを考慮した。

① 現代的な印象を抑える方法

- ・コンクリート面を露出しないで景観材を貼る、塗る、取り付ける、覆う。
- ・ステンレスやアルミ、ガラスなどの素材を直接表現しない。
- ・彩度・明度の高い色彩を控え、自然界の色彩や天然の生地を用いる。

② 存在感を弱める方法

- ・橋梁をカバーや塗装などの景観材で覆い隠す。
- ・スクリーンや壁などの景観材の陰に隠し、橋梁を見え難くする。
- ・色の明度、彩度を下げ、目立たなくする。
- ・迷彩色、保護色を用いることで、周りに同化させる。
- ・美しい形、安定した形とし、馴染ませる。

③ 景観調和の在り方

《同化させる》

同じ素材、近似する形やスケール、色彩では近似色・同系色などにより、本来別々のものが一体化（同化）して調和が保たれている状態にする。

《中立させる》

彩度の低い色、標準的な形態などにより特徴の希薄な存在とすることで、周囲から突出することなく馴染んでいる状態とする。

《対比させる》

明度や色相の対比的な組み合わせ、関連の希薄な素材を用いながらも各々の存在感が均衡している、あるいは各々が美しさを保っているために調和しているような状態とする。

5. 修景方法の検討

5-1 修景の方針

津合橋の修景方法を検討するに当たり、津合橋に求められるデザインと、デザインの方法から、次のような方針に沿って行った。

■修景の方針

- 橋の存在感を弱める方向のデザインを施す。
- イメージの固定化したデザインを避ける。
- 木や石、土など自然の素材の印象をデザインの基本とする。

5-2 修景方法の検討

修景は、露出の大きい橋上及び橋梁側面について検討した。

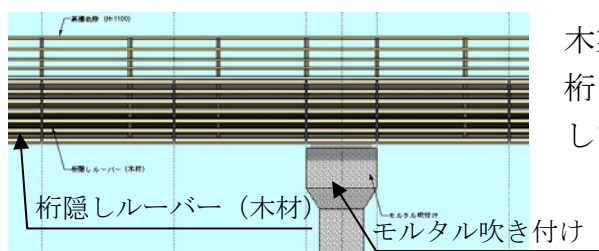
5-2-1 橋上の修景

橋上の縁石、地覆、親柱は、前後の道路部に合わせるため吹付けにより擬石化する。歩道は、土色系カラー舗装とした。

5-2-2 橋梁側面の修景

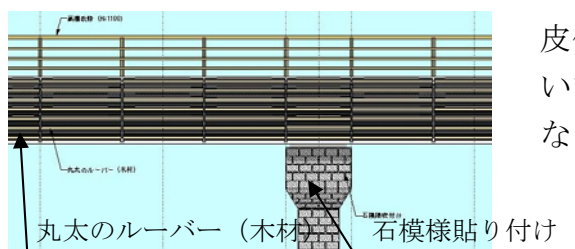
桁、高欄、橋脚の検討を行った。

【タイプ1】角材ルーバー案



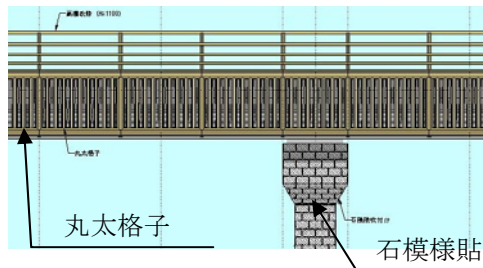
木製ルーバーによって橋桁などを覆い、見え難くして存在感を弱める。

【タイプ2】丸太ルーバー案



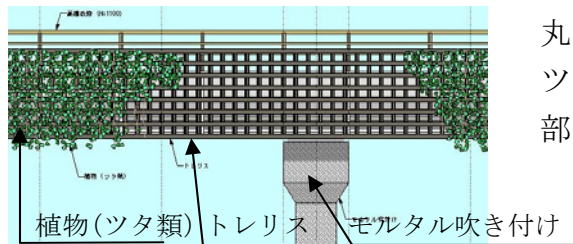
皮付きの自然の丸太を用いて陰影をつくり、橋桁などを見え難くする。

【タイプ3】丸太格子案



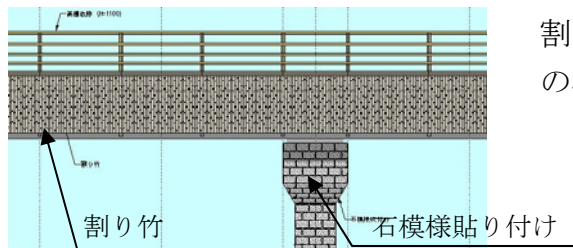
太い丸太の枠組みに丸太の縦格子を組み込む。

【タイプ4】丸太トレリス案



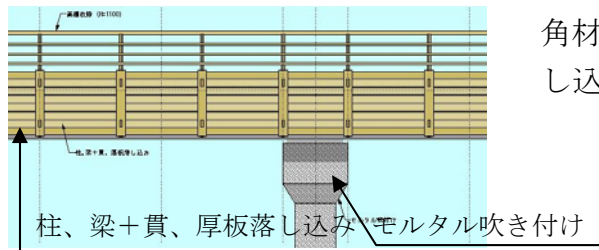
丸太のトレリスに常緑のツタなどを這わせて、桁部分を隠す。

【タイプ5】割り竹桁カバー案



割り竹を用いた犬矢来状の桁カバーを施す。

【タイプ6】角材木組み案



角材の枠組に厚板を落とし込む。

高欄の色は、前後の既存防護柵に合せダークブラウンとした。

橋脚については、モルタル吹付塗装、石材貼付、化粧型枠による表面仕上げの改修を比較検討したが、現在の橋脚でも周りの景観を阻害しないという理由から、橋脚は現在のままとした。

5-3 各モデルの比較評価

桁タイプは、次の4項目に照らして各モデルの評価を行なった。

- ①デザイン面 ○用いる素材において現代的な印象は抑えられているか。
○橋の存在感は抑えられているか。
○特定の印象を想起させないか。
- ②耐久性 ○部材の耐久性能は十分か。
- ③保守性 ○保守管理は容易であるか。
- ④コスト ○イニシャル、ランニングのトータルコストは妥当か。

評価の結果、タイプ1『角材のルーバー』が最適と判断され、採用することとした。

6. 結論

橋上	歩道舗装	前後の歩道に合わせて、土色のカラー舗装とする。
	歩道縁石	擬石縁石とする。
	親柱	高欄と歩道色の中間色を基本とする。
	高欄	前後の防護柵に合わせて、ダークブラウンとする。
側面	橋脚	修景は行わない。
	桁	角材ルーバーとする。

表 6-1.津合橋各部の修景方法

津合橋の景観にあっては存在感を消すことは良いが、そのために橋梁に対し弥生時代の引用のデザインを用いてはならないという、通常の橋梁デザインではあまり例のない制約を与えられた。

そのような橋梁の修景などできるのであろうかと頭を抱えることになるが、林先生をはじめ、多くの方々のご教授やご意見、ご協力があり、当地の主旨に見合った橋梁デザインを決定することができたと思う。

津合橋の修景工事は平成21年度に着手・完成することになるが、原の辻遺跡の景観に溶け込むことができるのであれば、うれしい限りである。



写真 6-1.橋上CG



写真 6-2.橋梁側面CG